「本意」に堕ちた中世人

衣川仁

人は何をしに神社仏閣へ行くのだろうか。

石清水八幡宮への参拝を思い立った仁和寺の法師が、山上に本殿があることを知らず、登っていく人々を尻目に麓の寺社だけを見て帰ってしまったという『徒然草』の一節（第五二段）がある。文末の「少しのことにも、先達はあらまほしき事なり」というコメントは正鵠を射たものだが、その直前にある一文がミソだろう。それは「神へ参るこそ本意なれ」というもので、そう考えていたからこそ、彼は山上まで登らなかったのである。

この場合の「本意」とは、「①かねての願い」（丸数字は小学館『日本国語大辞典』による「本意」の語釈番号）であるが、ここでは試みに「③本来あるべきさま」と解釈してみたい。あるべき「本意」を至上とする法師の態度は、無知ゆえにではあるものの、山登りを〈本来あるべき祈りのかたち〉から外れた余計な行動とみなしているようにみえる。そして中世では、法師以外にもこうした姿勢が確認できるのであり、それは〈祈りとはこうあるべきだ〉という宗教的な呪縛と言い換えてもよい。

神社仏閣へ行くこと自体は、中世のみならず現代でも多くの人が好むところであり、筆者もまたその一人である。最近こそあまり時間をとれていないものの、学生の頃は自転車でいろんなところへ行き、写真を撮ったりしていた。当時はデジカメではなくフィルム撮影だったので、現像に堪える被写体やアングルを自分なりに絞りこまなければならなかったことを思い出す。そんな苦労の甲斐あって今も授業で使うことがあるし、拙著『神仏と中世人』に掲載した写真の何枚かはその頃のものである。無駄ではなかったと思う反面、余裕のあったその頃にもっといろんなところへ行っておけばよかったという後悔もある。

ところで、気ままに寺社巡りをしていたその頃の自分の「本意（②真の意味）」とは何だったのかと考えてみると、正直にいえば参拝というよりも観光の方があたっているだろう。もちろん今の時代、観光はダメで参拝でなければならないというつもりはない。「神社・仏閣」を「漫画・アニメ」や「禅・武士道」と並ぶ日本の魅力と位置づけた「クールジャパン戦略（令和元年9月3日知的財産戦略本部）」（内閣府HP）や、「歴史的資源を活用した観光まちづくり」を目指す「観光ビジョン実現プログラム2019」（観光庁HP）の下に政策を進める政府も、神社仏閣を重要な「観光コンテンツ」とみなし、少なくともその点での〝魅力〟や〝価値〟については認識しているらしい。

そもそも神社仏閣は、クール（？）な政策的推進力を俟つまでもなく、古くから魅力ある観光地であり続けてきた。一方、仁和寺の法師は山に登る人々を観光気分でやってきたものとみなしたからか、〈本来あるべき祈りのかたち〉にしたがう自分と、したがわない彼らとは違うのだという優越感のようなものを抱き、あえて山に登らない自分に満足していたとさえ感じられる。こうした法師の行動からは、〈祈りのかたち〉の存在と同時にそれにしたがわない人々の存在も浮き彫りになってくる。昔の人の方が信心深かったと考えがちだし、現にそうであることが多いのだが、中世でもそんな人ばかりではなく、〈祈りのかたち〉に縛られない寺社巡りが存在していたとみてよいだろう。

とはいえ、神社仏閣へ行く理由は何といってもご利益のためであり、それは時代を越えて共通している。拙著でも具体例を挙げて論じたが、そこで言及できなかった事例にも興味深いものがある。

たとえば、今年のようにひどく暑い時に期待したくなる〝寒さを呼ぶ祈り〟が存在する。密教修法の効能などを解説した『覚禅鈔』によると、冬から温暖な気候が続いて氷室でも氷ができないため、一字金輪法を修して「寒風更に氷室を扇ぐこと重畳の由」を祈るよう要請があった。これをうけた僧侶は、暑さ寒さは「天然の理」だとしながら、尽きることのない「百皇の御運」と「三宝の冥助」の下で信心を凝らせば、必ずや願いは叶うだろうと答えている。このように、「本意（①かねての願い）」むき出しの難しい依頼に対し、もし失敗してもそれは信心が足りないせい、ひいては「百皇」「三宝」のせいだといわんばかりに、責任の所在を曖昧にした上で承諾しているのだから、僧侶の側もなかなかしたたかである。ちなみに、典拠の一つである『大陀羅尼末法中

一字心呪経』（『国訳一切経』）によると、この祈りによって「百姓熾盛に、国土安寧に（民が元気で、不安のない国）」になるという。暑さもさることながら、そろそろこちらの効果も期待したい今日この頃である。

中世の宗教は、「本意（①かねての願い）」の成就のためにはどの神仏にすがればよいか、そしてどこの寺社に行けばいいのかという情報を提供し、貴族社会はそれを取り込んで〈祈りのかたち〉としていた。こうしたご利益情報は現代にもあふれており、無宗教だなんだといいながら実際には関心も高い。振り返ってみると、筆者が生まれ育った界隈では、学問の神様である北野天満宮はもちろん、千本釈迦堂のおかめさんや釘抜地蔵（いずれも京都府京都市）など、親に聞いたのか学校で習ったか、よくわからないまま願掛けの対象として見知っていたように記憶する。

ただし、一字金輪という仏が寒さをもたらすものだと理解して祈りを依頼した中世人に比べると、現代人の知識はやはり見劣りがする。たとえば崇徳天皇陵でも知られる白峯寺（香川県坂出市）の「烏枢沙摩大明王」護符には、「大小便時」に効能ありとの文言がある。密教や禅宗では、不浄を転じて清浄とするこの明王を便所の守護のために安置することがあったという。トイレには神様がいるという曲も、おそらくこの明王のことを歌ったものではないように、たとえご利益につながるものでも、地元の人でない限りなかなか知られていないような情報も多い。拙著では、地域的な情報網の成り立ちや世代間での継承の問題には踏み込めなかったが、重要な視点かもしれない。

仁和寺の法師が「本意」に据えたものは、〈本来あるべき祈りのかたち〉であった。同じくこれを「本意」とみなした多くの中世人が、たとえ観光気分でも構わないと大っぴらにはいいにくいようなプレッシャーを感じていたのではないか。法師の参拝が示唆しているのは、こうした〈祈りのかたち〉の遵守に価値を置いてそれを半ば強いることや、〈かたち〉から外れた人々の行動を低くみる意識の存在など、神仏と中世人の関係にまつわる諸問題である。もちろん、中世にみえるこうした「本意」のあり方を「堕ち」る（⑤①比喩的に、しかけたものにかかる）とした本稿のタイトルは駄洒落のための過言でしかなく、〈かたち〉に縛られることもとりあえずはよしとすべきなのだろう。ただ拙著でも検討したように、中世の「本意」には信仰とは別の世俗的な思惑が隠されていたようである。ひるがえって現代はどうだろうか。あからさまな圧力や思惑はないかにみえるが、たとえば〝参拝時の正しいマナーはこうだ〟などと、「先達」たちが新奇な〈かたち〉を提示することもなくはない。些事ではあるが、そこは人それぞれの節度に期待しつつ、プレッシャーなく気ままに寺社巡りができる世であって欲しいと思う。

（きぬがわ　さとし・日本中世史）